未来に希望を込めて

「労働と人間」を問い続けるワーカーズコープの子育て支援

松沢　常夫

開眼

自由に言っていいんだ！

「自分の考えを言っていい、自由に言っていいんだっていうこと。それは、人間の中にある本来のものだと思うんです。それが今まで抑えつけられていた。言っちゃいけないって。何十年も生きてて、ワーカーズの中で三年間働いて、はじめて開眼させてもらったということです」

「どこでも、上の方の言うことを素直に聞いて、忠実にやっていくのが優秀な人たちだという観念を植え付けられてきました。でも、ワーカーズはそうではなくて、常勤だろうと非常勤だろうと、自由にものが言える。その中で、こういう考え方もあるね、じゃあみんなで考えていこう、とやってこれました」

「以前は、子育てのことだけが子育てにとって大切なことだと思ってたのが、今は、すべて社会のことが関わっている、すべてを学ばなくちゃいけない、と考えるようになりました。すべて世の中のことはつながってる、ということも、ワーカーズで勉強させてもらったことです。子どもが楽しいと思える学童をつくろう、子ども主体でやろうとしてくる中で、私たちもレベルアップできました」

福岡県大野城市で学童保育指導員をつとめる川本美紀子さん（五八歳）は、ＮＰＯ法人ワーカーズコープ（労働者協同組合センター事業団が活用している法人名）の一員として働いてきた三年間で自分のどのような力がひきだされてきたのかをしみじみと語った。

福岡市と福岡空港に隣接する大野城市。この一〇年間で人口は一万人増加し、約一〇万人に。一〇校ある小学校に対応して一〇カ所の学童保育所（留守家庭児童保育所）が設置され、一年生から三年生までの約六〇〇人が放課後の五時まで（延長は七時まで）過ごす。

川本さんは、大野城市など二つの市で嘱託職員として三年間ずつ学童保育指導員をつとめ、民間委託により地元で幅広く子育て支援を展開するＮＰＯ法人が運営を始めると、その常勤職員として四年間働き、委託先変更に伴って二〇〇八年度からワーカーズコープに移った。いわば大野城学童の歴史を体現する一人だ。

ワーカーズコープとは、働く人たちが出資も経営も担い、一人一票の決定権を持つ労働者協同組合という協同組合で、「協同労働の協同組合」とも呼ばれる。

日本ではこの組織に対応する法律がないこともあって、あまり馴染みがないが、三〇年余の歴史を持ち、とくにこの一〇年、高齢者介護、若者や失業者、障がい者、生活保護受給者の自立支援・就労支援、公共施設管理、食・農関連、病院清掃など幅広い仕事を行い、子育て分野では、保育園、一時保育、ホームサポート、親子ひろば、病児保育、障がい児デイサービス、学童保育、放課後全児童、児童館、二四時間対応総合的支援、寺子屋、子育て相談等、多様な支援を全国約二百現場を拠点に行っている。

その特徴は、失業、貧困、孤立などさまざまな問題を抱える家庭と地域社会の中で求められる子育て支援とは何かを問い、制度の枠を越え、高齢者介護、若者支援等あらゆる世代のテーマや、保護者の就労支援、商店街活性化等、違う分野とも結んで、地域の最も困難な課題を解決するため、必要なあらゆる支援を地域の人々と一緒に創造していこうとしている点にある。

たとえば、社会連帯機構という組織も作り、お腹をすかせた地域の子どもたちに食事を提供し、交流を深める「まんぷくＤＡＹ」を毎月開催する（ワーカーズコープが運営する東京・福生市の児童館）などの子育て支援を各地で広げている。

ワーカーズコープ大野城事業所の三年間を振り返り、子どもたちの未来を拓く新しい働き方を探った。

混乱

働くのになんでお金がいるの

二〇〇八年、大野城市での学童保育所の仕事が、地元ＮＰＯからワーカーズコープ（以下、ワーカーズ）に替わった時、学童保育指導員の中では、「まじめにやってき

たのに、なんで！」という不信感やとまどいが広がった。
市には、運営団体を一度替えたい事情があったようだが、学童保育の仕事に特段の問題が指摘されていたわけではなく、突然で、しかも、「私は子育て支援をやりたくきてる。ワーカーズだの、協同労働という働き方がどうのなどということは関係ない」という思いだったからだ。
指導員研修会で、働く者同士の協同・利用者との協同・地域との協同という「三つの協同」を大切にする働き方などを聞き、拝金主義の世の中に違和感を持ち、大切なものを失っている社会だと感じていた川本さんは「これは面白い」と直感した。
「企業の利益ではなく、人間が中心になっている感じがしたんですね。自分だけのことを考えているのではなく、いろんな人と手を結んでやっていくんだと思いましたし、ここなら、自分の考え方を持って、それを言っていい、人間らしく働けるのではないかと、すっと入ってきたんです」
しかし、大半の指導員は「わけがわからない。三月一杯で辞める」となった。
後に所長になる星平順子さん（五四歳）も辞めることにしていた。しばらくして、生協と同じように協同組合だから出資が必要ということは一応理解したが、一口五万円の出資が必要、とされた点については納得できなかった。
「働くのに、なんで五万円出さんといかんのか、全然わからなかったですね」
三年間指導員として働いてきた星平さんは「ぜひ残って」と懇願され、応じることにしたが、「協同労働とかワーカーズとかは関係ない。とにかく学童の仕事を続けることに変わりはないし、任された仕事をきちっとやればいい」という気持ちだった。
結局、ワーカーズに移って指導員として働くことになった人は三〇人弱。ようやく半数を上回った程度。ワーカーズは新規募集や他事業所からの異動で補充したが足りず、事業所長にも学童保育現場の経験がないワーカーズのリーダーを据えざるをえなかった。
さらに、主任、月給者、時給者、という給与のあり方を変え、全員時給（当時七五〇円。ただし、長時間勤務手当、経験者手当支給）としたことも混乱の一因となり、それまでの「主任だけで会議」という運営から、全員で話し合って決めるように変えたことが、〝好き勝手を言っていい〟と受け止められてしまった学童も生まれた。

私は悪くない、謝りません

こうした混乱状況を解決するためにも、「現場から所長を」という当初からの方針の実行が急がれ、星平さんに白羽の矢が立てられた。星平さんは、「嫌といえない性分」で、「混乱している現場を変えていく手助けになるなら、微力ながら力になりたい」と、引き受けた。

しかし、〇九年四月から所長として事務所に出勤するようになると、かかってくる指導員からの電話は「ワーカーズさん（事務所）がやってくれるんですよね」というものばかり。一〇学童を統括する事務所勤務者は月給ということもあり、現場対事務所という対立構造は想像以上だった。

さらに、問題視されていた現場の様子は驚くばかりだった。ある学童を訪ねると、直営の時から使われていた〝子どもを見守る〟という言葉通り、本当に見守っているだけの指導員もいて、子どもに即した言葉かけもない。騒いでいる子どもたちに「静かにしなさい！」と言うだけ。ルールも決めない。子どもたちが棚に乗って遊んでいても放置している。

一緒に働く仲間に不快感を与える言葉を発していた指導員に「直してもらいたい」と言うと、これは〝自分表現〟であり、「私はこの気性で生きてきた」と言い張る。

市から、保護者からクレームがあったと連絡がくる。「学童が面白くないと子どもが言っている」「指導員の口の利き方が悪い」「子どもに対して冷たい」などだ。「全部が当たっているわけではなかろう」と思いつつも、当該の指導員に伝えると、「私は悪くない、謝りません」。

食べさせなくていいです

星平さんが一番気になったのは保護者の状態だ。

人と話すのが嫌とばかり、車から降りない保護者、帽子を目深にかぶり、目も合わせない保護者もいる。

夏休み、一日保育になると、こんな例も報告された。

コンビニで弁当を買って、一二時半に届けに来る一年女子のお母さんがいる。いつも顔を子どもの前に突き出し、「食べるの！　食べないの！」しか言わない。お母さんがなかなか来ない日があった。指導員が勤め先に電話すると、「今日は会社の研修で抜けられません。食べさせなくていいです」との返事。（お父さんに連絡がつき、食べさせることができた）

欠席の連絡がないので、家に「今日はお休みですか」と電話すると、「行く行かないは勝手じゃないか！」とキレた感じで対応されてしまった。

ワーカーズに移った当初、「今そこにいるその子」しか

見ていなかった星平さんだが、こうした現実を知るなかで、「全くゆとりがなくなっている保護者、様々な問題を抱える地域とどう向き合うか」という視点を持つようになり、ワーカーズを批判し、保護者を批判し、自らを変えようとは決してしない指導員とは、正面から対決しなければならないと思い始めた。

宣言

ここに全てがある！

〝なんだ、ここに全てが書いてある！　全てがあるじゃないか！〟

星平さんは、目が覚める思いがした。〇九年九月の労協センター事業団全国事業所長会議に参加し、「七つの原則」と呼ばれている協同労働の協同組合の「定義・使命・原則」の読み合わせをしていた時のことだ。

所長になって半年。全国的な会議にも何回か出席し、「原則」の読み合わせもしていたが、右の耳から左の耳へと抜けていた。しかし今回は、「協同労働の協同組合とは、働く人びと・市民が、みんなで出資し、民主的に運営し、責任を分かち合って、人と地域に役立つ仕事をおこす協同組合です」という定義はもちろん、「自らの労働の価値を大切に」する、「仲間の言うことを受け止め、自分の意見を述べられる人」に成長するなど、原則ごとに数項目ずつ掲げられている「指針」が、ずんずんと身体の中に入ってきたのだ。

「ちゃんと仕事をしなさいっていうことも書いてあるし、仲間と仲良くしなさいってあるし、建設的で前向きな意見を言うようにするんですよ、というようなことも書いてある」

生活と地域を焦点にしきった事業・運動・組織を、主体者として創造していこうとする姿勢が「原則」に貫かれていることを発見した星平さんは、大学を出てから三年間勤務した僻地での小学校教員時代を思い出していた。

全校児童数八人。担任した一年と二年の複式学級は、二年生が転校し、一年生一人だけという時もあった。学校は地域、文化の中心で、学校行事は何もかも地域の行事だった。学習発表会には保護者だけでなく地域の人たちもこぞってやって来て、子どもたちに拍手を送った。そこには、地域共同体に育まれる子どもたちの姿があり、他人の責任にしてすませている世界はどこにもなかった。

星平さんは、ワーカーズの組合員である学童保育指導

員たちに「あなたたちには生きていく哲学がないのか！労協の現場は七つの原則、三つの協同、よい仕事が哲学なんだ、正義なんだ！」と言わなければならない、と覚悟を決めた。

大野城の「労協宣言」

全国所長会議を受けた九月の大野城事業所ブロック会議（当時は三ブロックに分け、一五、六人ずつ全指導員が参加）で、星平さんは「七つの原則」を読みあげ、こう話した。

「あなたたちは、七つの原則に則って、ワーカーズの組合員としてきちんと仕事をする、ということを最初に誓約してますよね。誓約しているからには、知りません、わかりませんは、なしにしましょうよ。今日から私も変わる。みなさんも変わってください。これからは、ワーカーズ、労協の現場としてやっていきます。今から新しく築いていきましょうよ」

その訴えは、参加していたセンター事業団九州事業本部の平本哲男本部長が驚くほどの「ものすごい迫力、剣幕」で、全体がシーンと静まりかえったという。

「本当に子どもを受け止め、よい仕事をやっていこうと思ったら、自ずと三つの協同の視点が必要になる。私は、七つの原則、三つの協同は間違いないと思う。人間として当たり前のことだと思う。違うと思うなら、まずやってみて、違ったらまた言ってください。あなたのワーカーズですよね、あなたも同じ仲間じゃないですか。一緒にやっていきましょうよ」

この呼びかけに、異論は出なかった。ワーカーズに替わった時の最初の説明会で、おそらくただ一人、「新鮮で、面白い」と感じた川本さんは、この宣言を「みんなで力を合わせてやっていけば何か動かすことができるよ、地域限定で小さくまとまらないで広く世の中を見てみようよ、人間が人間らしくものごとを考えて行動していいんだよ」という呼びかけだと受け止めた。

何日かして、経営のことで指導員と話し合っていると、「だって、七つの原則に書いてあるでしょ」という発言が出てきた。

毎月開く全体会でも、「これこれについて、三つの協同に基づいて発表してください」とテーマを明確にし、各現場から実践報告をしてもらうようにした。

文章にして公の場で発表するとなると、「なんか知らんけど、ワーカーズはいやだ」というような、感情論での無意味な批判はなくなった。自分のしたことを言葉にするなかで、客観視し、分析する。整理でき、次の見通

しまで立ち、徐々に意識が変わってくる。
そして、評価されると、「あ、そうなのか、自分たちがふだんやっていることが三つの協同なんだ、協同労働ってそんなに難しいことじゃないんだ」と実感するようになっていった。
星平さんは、そんな変化を生み出したブロック会議の三日間を、大野城の「労協宣言の日」と名付けた。

怒濤

〝怒濤の攻め〟―「労協宣言」後の取り組みを、星平さんはこう自賛する。日々の学童保育業務に止まらず、まず、子育て相談業務という仕事をおこした。企画書を市に出し、担当課が国の「緊急雇用対策」のお金を引っ張ってくることで実現した。一五回にわたる自主学習会も開いた。さらに、八地域で地域懇談会を開き、よい仕事研究交流集会、基金訓練からの仕事おこしへと、一気に取り組み始めたのだ。

保護者の悩み、知らないまま

子育て相談業務を企画したのは、保護者のキレた感じの電話を受け、「こういうお母さんには友達もいないんだな。誰か一人でも怒りの受け手がいれば、その人に話すことで緩和されるけど、自分の中だけで抱え込んでいると、わあっ！　と溢れ出るんだな」と思ったからだ。
保護者との会話が多い保育園の仕事を経験してきた副所長の浜崎佐和さん（三四歳）も、保護者への支援の重要性を痛感していた。浜崎さんは、勤務していた保育園で、自分が考えるような保育ができず悩んでいたところに、大野城学童のスタッフ募集広告を見て応募。星平さんが所長になると同時に副所長になった。
市も子育て相談をしているが、昼間だけ。ワーカーズは、〇九年一〇月から各コミュニティセンターで午後六時～八時に、学童保育所でも五時～七時の延長保育の時間に予約制で相談会を開き、ベテラン相談員二人が一人の利用者に一時間以上対応した。
ワーカーズが全国的な取り組みとしていた地域懇談会も、一一月から八地域で開いた。懇談会では、月六五〇〇円という学童保育の費用が払えない家庭、親が深夜まで仕事をし、子どもは毎朝遅刻して学校に向かう家庭など、それまで隠れていた子どもや家庭の問題にも気付かされることになった。
「なかでも頭にこびりついている」と浜崎さんが言うのは、学童の保護者でもあるシングルマザーの方の話だ。

「一生懸命子育てをしていましたが、相談するところもなくて、一番詰まった時は、人と会いたくなくて外部との接触を避けました。今は気持ち的に楽になったけど、ほんとに苦しかった」

孤立化し、一番苦しんでいる親や家族には支援の施策が届かない、ということはよく指摘されていることだが、どういう状態に陥るのかを直接聞いた誰もがショックを受けた。とくに衝撃を受けたのは当該学童の指導員たちだ。

「お母さんが、そんなに苦しんでいるなんて全く知らないまま、その子に接していたわけですからね。だから、この懇談会は指導員が変わる大きなきっかけになりました」と星平さん。

浜崎さんも改めて思った。

「いろいろ情報はあるけれど、地域の支援が一発でわかるようなものがない。すぐに気軽に行けるところがない。やっぱり、そこまで追い込まれる前に、気軽に行ける場、気軽に話せるネットワークが絶対に必要だ」

懇談会では、「夕方のパトロールで学童も回るようにしたい」「公民館を居場所として開放しているので利用してほしい」という申し出があり、「みんな頑張っているのに、逆に警戒しあう構図ができている。こういう場があると、相互理解が深まり、助け合いが始まるのではないか。こういう場をどんどんつくってほしい」という期待も寄せられた。

懇談会が終わっても保護者同士はずっと話しており、公民館長たちも「そちらはどんな活動をされてるんですか」「うちはこう」というように交流している。浜崎さんは、「ああ、今の社会では、人々がほんとに分断されているんだな」と思い、地域懇談会の意義を再確認できたという。

もう一回チャンスを

「何か投げかけんと、変わらんよね。一生懸命やってるけど、ポイントがずれてる。的確な視点、ポイントを持ってもらうことが大切だよね」

指導員の保育実践を見ていてこう考えた星平さんたちは、児童福祉分野の専門家である山口祐二先生を講師に、一〇月からほぼ毎週、午前一〇時から二時間、自主学習会を開くことにした。

「大きく変動する社会で子どもたちも様々なニーズを持っている。とくに障がいや情緒不安定などの問題を抱えた子どもたちは集団で保育していくことが難しい場合が多い。子どもや背景にある家族、環境への理解を深

め、関わりのスキルを身につけていく」という目的を掲げた。

コミュニティセンターや市役所会議室などを会場にした学習会には毎回二十数人が参加。「子どもには『ちゃんとしなさい』ではなく、『なんでできんとぉ?』『できるようになるにはどうしたらいいとぉ?』というように寄り添わなければいけない」「問題行動のある子どもの保護者連絡帳に『今日もけんかした』とか羅列してもしょうがない。学童であったことは学童で解決するのが当たり前。こう働きかけたらこうなったと伝えなければ」などの山口先生の話を聞くうちに、こんなエピソードも生まれた。

〝隣のおばちゃんたち〟が協力して放課後の子どもをみているような学童がある。やんちゃで手がかかる子がいて、「なんでできんとね!」と叱る。保護者にも「またできんかったですよ」と言う。子どもは当然面白くない。学童をやめる、となった。しかし学習会に出ていた指導員が保護者に言った。「やめないで下さい。もう一回チャンスを下さい。そのかわり、私たちとお母さんと子どもも入れて話しましょう。学童でどんな風に過ごしたらいいかを」と。その結果、学童を続けることになった。

働く時間が短く、収入も少ないため、夫の扶養に入っている指導員がほとんど。資格も経験もなく、「専門性、自立性、当事者性を求めるのは無理」と見られていたような人たちも、子どもたちを「なんでできんとね!」と突き放すのではなく、「明日はできるもんね、待ってるよ」と、子どもに寄り添い、成長・発達を見守っていく指導員に変わっていったのだ。

この学習会は、労協センター事業団九州事業本部のバックアップで続いている。

障がいのある子どもたちと共に成長

二〇一〇年一月には、全現場からほとんどの指導員が参加しての「よい仕事研究交流集会」を開いた。

ワーカーズが全国的に行っているよい仕事集会の福岡エリア集会に参加する現場を選ぶためだったが、「発表しあうことが楽しい」「次はプレゼンをもっと工夫したい」という声も出て、九月には二回目を開催した。

私も取材したが、平日で午後は保育があるため午前九時半開始。「報告七分、質疑応答四分」で、まさに分刻み。

最も多いテーマは、障がいのある子どもとどう寄り添ってきたか。

なかでも、一年生二人がわずか二、三カ月で、保護者

から聞いていた状態とは全く違う姿を見せ始めたというZ学童の報告には、目を見開かされる思いがした。

Aくんは「自閉・精神遅滞で落ち着きがない」、Bちゃんは「甲状腺機能低下症などで足腰が弱く走れず、他の子とちょっとぶつかっただけで転倒する」―そう聞かされていた五人の指導員は、どうすればいいか不安だったが、事前に保育園に行って様子を見、特別支援学級の先生に来てもらって話を聞くなど勉強した。

そして、加配を依頼し、代表者がこの二人を常時みるとともに、指導員全員が三週間交替でみることにし、問題が起きる度に、どこが障がいで、どこを見守るべきなのかを指導員全員、時には児童も全員、一緒に悩み話し合った。

Aくんは他の児童と同じ行動をとりたがるのでぶつかりあいが多かったが、三年生の一人は、指導員の対応が二人に対してと他の児童に対してと違うことを批判。指導員はどうしてわかってくれないのかとも思ったが、この子の言うことの方が本当ではと思い直し、平等に叱り、注意するようにしていった。

夏休みは学童で生活する時間が長い。昼寝の時間を設けているが、絶対に寝ないAくんに指導員は困っていた。すると、この三年生が「Aくんの言葉がわかってきた」と言い、「寝ろ！」と言うとストーンと寝てしまった。やがて、他の子もAくんを寝かせることができるようになった。

Bちゃんはみんなと一緒に遊ぶ時は走ることができるようになった。水がかかるだけでもだめ、プールは無理、と聞いていたため、まず水に慣れるようにとビニールプールも購入したが、他の児童の真似をしてプールの中を歩きはじめたBちゃんは、縁をつかんでバタ足をすることも出来るようになった。

五人の指導員全員の意見をまとめたというレポートを三人の指導員が交代で読み上げ、薄い萌葱色とピンクの大きな模造紙に貼り付けた二十数枚の写真を話に合わせて指差す。会場のみんなは食い入るようにしてのぞき込む。

発表者は、「苦労や問題を共有でき、信頼が深まり、お互いに育ち合うことができました。中でも、一番の先生は、学童の子どもたちでした」とまとめた。

Y学童の佐藤千代香さんたちは、「ダウン症で、耳がほとんど聞こえない一年生Cくんのため、指導員一人が手話教室に行き、みんなで覚え、『おいしいね』『ありがとう』などのカードも作り、みんなが語りかけた。そのことで、学童の雰囲気が温かくなった」と報告。手話ソン

グ『BELIEVE』を実演、拍手喝采を浴びた。
後日のことだが、保護者や地域の方々に呼びかけ、「協同労働で学童を運営すること」というフォーラムを開いた。その際、Cくんのお父さんは、「名前も写真も公表してもらっていい。この子のことを地域に知ってもらい、地域で支えてもらいたい」と話し、フォーラムにも参加された。
よい仕事集会の段階では、学童で「Cくんと遊ぶプロジェクトチーム」を作る構想が出されていたが、その後、「責任が重すぎる」ということで、毎日、「Cくん係、やりたい人」と聞き、自主的に申し出てもらうことにした。一緒に宿題をし、おやつを食べ、遊ぶという係だが、Cくんは落ち着きがなくなると、叩く、蹴る、髪を引っ張る、物を投げる、ツバを吐くなどの行動をとることもある。自分の気持ちを表現する方法だとみられている。
頭と宿題ノートにツバをかけられ、「死ね、あっち行け！」と、泣きながら叫んだ三年男子もいた。
佐藤さんたちは「よくがまんしたね。でも、つらかったね」と声を掛け、ノートをきれいにしてあげ、みんなに話した。
「先生があなたたちを支えるから、みんなでCくんを支えていこうね」
二〇人ちょっとの学童だが、半数くらいの子が係を経験。「わんぱくで大変な子」も、「ありがとう」とほめられ、またやりたいとなった。
Cくんは、魚の絵を見て、「さかな」と書き、手話でも表現できるようになっている。
佐藤さんは、Cくんの成長と周りの児童たちとの関わりを見ていて、養護学校に通った方がいいのでは、という当初の考えが変わってきたという。
「普通の学校だと、とにかく刺激が違います。集団の中で遊ぶし、運動会も輪の中に入って踊っていました。学童でも、ルールを素直にすぐ覚えるのはCくんです。いろんなことを見て、学んでるからですね。ここでの経験は生きると思うし、こういう育ちもあっていいのかなと思います」
子どもは、人との関わり、モノとの関わりの中で育つ。それゆえ、その関わりの豊かさがきわめて重要だといわれるが、障がい児と周りの子どもたちとの共感的交流が組織された時の、学びと成長には驚くほどのものがある。
星平さんは、障がい児に関わる報告をする指導員の中には、会議であまり発言をしない人もいることに注目し、「障がいのある子どもを保育するのは本当に大変だ

けど、仕事を極めるとか、仕事を掘り下げるとかする中で、みんなに聞いてほしい、という思いが出てくるのかな」と話し、前のＮＰＯ法人との大きな違いを指摘した。

「前のＮＰＯの理事は、障がいを持った子どもさんはなるべく預からないようにしたいと話していました。指導員の先生には、あまりいい条件でなく働いてもらっているから、これ以上負担をかけるのはしのびない、と。私たち指導員も、ああ、私たちのことを考えてくれてるんだなと思っていました。でも、ワーカーズでは、そんなこと言ってる人がいたら怒りまくりますよね。〝誰が学童の主役なのか！　指導員なのか、そこにいる子どもなのか！〟って」

佐藤さんも、「そうそう」と相づちを打ち、「ワーカーズは障がい児を全て受け入れる。それで学んだことは一杯あります。自分たちの都合で働くのではなくて、その子と保護者のために何が一番必要なのか、地域とはどう結んだらいいのか、というようなことも考えるようになりました」と語った。

無関心な親だと思っていたが

よい仕事集会ではまた、保護者に対する見方を、子どもたちと話す中で反省したというＸ学童、横井奈津美さんの話に強く胸を打たれた。

「二、三年生の保護者は、当初は学童に関わりたくない感じで、お迎えの時に話しかけてもうつむいたまま。子どもが頑張ってたことをどんどん伝えようと、連絡帳はもちろん、電話をしても、『また電話？』と、うっとうしそう。無関心な親だ、と思いましたが、子どもたちに聞いて、その間違いに気がつきました。

『お母さん（お父さん）はいつ帰ってくるの？』…『今日も仕事、帰ってくるのは夜九時。それまでおばちゃんの家にいる』『一人でおうちにいる』

『ごはんは何時に食べるの？』…『夜一〇時』

Ｘ学童では三年生の三分の二が父子・母子家庭。ものすごく忙しくて、子どもとふれ合う機会もない。子どもたちを食べさせていくのに精一杯だったのです。

そこがわかって保護者に働きかけていくと、『いつもありがとうございます。自分の仕事で精一杯で宿題も全然見てやれません。子どもにいろいろ話をしてくれるだけでも本当に助かっています』というような言葉が返ってくるようになりました。まったく顔を見せなかった保護者が『うちの子、どうですか』と聞きにくるようになり、〝あ、うちの子、こんないいとこあるんだ、ここでつまずいてるんだ〟とかわかると、よく話をしに来られ

るようになりました」

さらに横井さんは、その日の夕刻にあった出来事を、翌日開かれた福岡エリアのよい仕事研究交流集会で報告した。

「昨日、延長保育の時、一年生の男の子が『学童に入れてほしい』と来ました。市役所に申し込むんだよというと、『ぼくはどうしても入りたい。だけど、お母さんが、お金がないから入れないって』。それを聞いて、すごく悲しくなって……。他の子に聞くと、『あの子もお母さんしかいないよ』というのです。三兄弟のお兄ちゃんで、弟の面倒をみている。遊ぶ場がないから、いつも学校の前でうろうろしている、と。そういう子が寄り添える場、安心して過ごせる場、お金がなくても、誰でも来ていいよ、といえるところ、お話しを聞いてもらいたいなと思ったら、すぐ聞いてくれる場、それが学童保育所であるべきではないかと思います」

子どもとつながるすべてを支援

「子どもとつながるすべてのものを支援することが本物の子育て支援だ」

浜崎さんは、高まるみんなの思いを端的に表すこの言葉を、そう感じた場面も含めて事業所のニュースに書いた。

「学童の運営では、社会に疲れきって、外部との接触を避けたがる保護者や、毎日イライラして精神的に落ち着かない保護者に出会い、子どもを学童へ通わせたいけど派遣切りにあって無理という方、学童を退所する方もいらっしゃいました」

「地域懇談会では、子育てや生活に行き詰ったシングルマザーの話や、地域社会の分断を感じました」

「子育て相談では、誰かに話を聞いてもらうだけで、次の日も頑張れるという保護者や指導員の様子も見てきました」

そして、週一回の自主学習会で、そうした現状を分析し、学ぶ中で、「子どもとつながるすべてのものを…」と感じたこと、その「すべてのもの」には、「保護者、地域」が入り、「子どもの成長や行く末」までもが入ること、これを支援するとは、「安心して子育てができる暮らしを保障し」「子どもの成長や行く末までを見守ってくれるような地域をつくる」ことだと続けていた。

浜崎さんは、小学一年生の夏休みを母の実家がある町の公民館で過ごした体験がある。知らない小学生から高校生までの中で遊び、宿題をしたが、すごく楽しかった思い出として残っている。その町には、仕事を見つけて

働かなければいけない母の出すヘルプサインをとらえてくれる人もいた。

それだけに、地域丸ごとで安心できるまちをつくりたい、子どもたちがおとなになった時、〝自分もこういうことをしてもらったんだな〟と思える良い循環をつくっていきたい、という言葉には実感がこもっている。

星平さんが「子どもたちがみんな笑顔だといいね」と、少しかっこつけたことを言うと、二回りほど若い浜崎さんは「その子たちがおとなになった社会ってどんなですかね。すごいですよね、所長、そう思いませんか」と、真顔で返す。

浜崎さんにこのことを提起した思いを改めて聞くと、「人もつながっているし、時間もつながっている。支援っていうのはずっとつながっていく。特別なことじゃないんです」と答えてくれた。

「七つの原則に則って、ワーカーズの現場としてきちんとやっていこう」という「労協宣言」が大野城の組合員の出発点だったとすれば、子どもたちや保護者の今と未来に、当事者として向き合う「子どもとつながるすべてのものを支援する」という決意は、協同労働による「子育て支援のよい仕事宣言」ともいえるだろう。

落選

〝実績は関係ない〟なら何を

こうした実践・実績を積み重ねてきたにもかかわらず、ワーカーズは、二〇一一年度から始まる次のクール（今度は五年間）を受託することはできなかった。

二〇一〇年一〇月一五日、浜崎さんは、選考結果の発表時間ピッタリにパソコンを開いた。不安もないわけではなかったが、市の担当者の姿勢からしても、継続は間違いないと思っていた。しかし、画面には信じられない現実が映し出された。パソコンが狂っているのではと、もう一台のパソコンを開いた。だが、結果が変わるはずもなかった。企画書の点数で相手が上だったというのが選考委員会の示した理由だ。

ワーカーズの田中羊子専務は、憤懣やるかたない面持ちで訴える。

「私たちは、市民が主体となり、もっと豊かな公共を生み出していこうと、企画書に書き、プレゼンに臨み、それが採用されたが故に、それは行政とも共通の評価基準であると思ってきた。ところが、〝実績は関係ない〟と言われた。では、何のため、どんな効果を期待した民営化なのか。実際にどういう成果があったのかを踏まえ

て、次のクールの政策目標を定め、委託先を選定すべきではないのか」

X学童の高次玲映さんも、こう問う。

「私たち指導員は、いいようにあっちへ転がされ、こっちへ転がされしてる。働いてる人が元気でのびのびしていないと、子どもたちにも影響してくる。だから、市に聞いてみたいですね。なぜそうなったのか。前のNPOのどこがだめでワーカーズになり、今度はなぜワーカーズがだめなのか」

幼稚園や小学校の教員を経て、学童保育指導員を前NPO時代に一年間、ワーカーズでも三年間経験してきた高次さん。

「前のNPO時代は、ずっと、見守りのおばちゃんで、掃除をしたり、子どもたちがケガがないように見守るだけ、という感じだったのが、自分たちの力で勉強会もし、子どもたちの生活の場をきっちり確立していく仕事にしてきた。それなのに、なぜ！」

単なる預かりの場から、子どもたちの安心と成長・発達を生み出す場とし、自分たちも誇りの持てる仕事として創り上げてきたからこその怒りだ。

さらに問われるべきは、学童保育は誰のためにあるのかということだ。それは子どもたちであり、保護者であろう。この主人公と指導員、そこを包む地域の人々の意見や評価があったうえでの選考、というのが当たり前ではないのか。

革命

仲間と関わり、力を身につける体験こそ

ワーカーズの仕事としては、あと二カ月ちょっとととなった二〇一一年一月、大野城市の中でも、やや小高い場所にある、川本さんら三人の指導員が働く学童保育所を訪ねた。午後二時を過ぎると、時折、激しく吹雪く中、向こうの校舎から、ランドセルを揺らし、校庭を跳ぶようにして突っ切り、子どもたちがやってきた。

「ただいま」「お帰り」「ただいま」。元気な声がこだまする。そして、見知らぬ私を見て、「こんにちは」。みんな、きちんと、こちらの目を見て挨拶する。子どもたちはカバンを棚に入れると、すぐ机に向かい、宿題にとりかかる。右と左の部屋に二十数人ずつの子どもたち。落ち着いた空間が広がる。

その中の一人を見つめて、川本さんは、こんな話をしてくれた。

Dくんは三年生で母子家庭のひとりっ子。落ち着か

ず、いつもイライラし、突然、わけもなく友だちを蹴ったり、殴ったりしていた。話を聞こうとしても、ふてくされ、時には学童を飛び出す。そんなDくんを子どもたちは恐れ、遠巻きにするようになった。

そのうち、「ゲームがしたい」「学童休みたい」と言い始めた。家ではゲーム漬けの毎日。お母さんがとがめると、「お父さんがいないからイヤだ」と言って困らせ、時には暴力も。離婚で引け目を感じているお母さんはDくんに言われるまま、昨年秋、学童の退所を申し出てきた。Dくんが退所すれば学童は平穏になる。しかし、それでいいのかと思った。

Dくんはワーカーズになった時、一年生で入ってきた。自分の気持ちをうまく伝えられず、よく泣いていた。彼が自分の気持ちをうまく伝えられるよう指導員は心を砕いた。けんかして泣いている時は、「そうされてどう思った？」と、気持ちを引き出し、「いやな気持ちになった」と言えば、「その気持ちを相手に伝えてみて」「相手の気持ちも聞いてみて」「それを聞いてどう思った」と次々に広げていった。

土曜の工作の時間には、作った折り紙の動物の気持ちになってお話をつくらせ、心の中のものを言葉として出せるようにしていった。こんな風にする中で、彼なりに自己表現できるようになってきた。

だから、Dくんには、指導員や学童仲間と関わることで、喜びを共有し、悲しみを乗り越える力を身につける体験こそが必要だと思った。

しばらく欠席していたDくんが登所してきた時、「Dくんを慕っている下級生が毎日待っている、これからも三年生として学童を引っ張ってほしい、お父さんの分までがんばっているお母さんを助けてあげてほしい、何よりT学童にはあなたが必要だ」と話した。聞き終えるとDくんはしっかり目を見て言った。「学童つづける」。

川本さんは、父のいない現実をどう乗り越えていくかは、これからのDくん自身の問題ではあるけれども、今のDくんを支えるのは、今、出会っている者の役割であり、自分が保育者として何ができるのかが問われているし、何もできなくても心に寄り添うことはできる、と話す。

一連のことを担任の先生に報告すると、先生もDくんに「困った時はいつでも話を聞くよ」と言ってくれた。お母さんにも変化が見え、毅然と対応する姿も生まれきたという。

「当事者性」を大事にした働き方、働く質の高さが、関

わる人たちの生き方に大きな影響を与えている。

一緒に考えていく過程は楽しく貴重

川本さんは、「子どもに、よい子・悪い子の区分けはない。問題行動は、助けを必要としているその子の心の叫びだと捉えれば、自分のしなければならないことが見えてくる」と言い、問題行動が起きても、叱ったり、とがめたりするのではなく、一緒に考えようという姿勢でのぞみ、子どもたちの考えをどんどん引き出している。

「その過程は楽しく貴重ですし、そうしていると、周りの雰囲気も変わってくるから不思議」というのが川本さんの実感だ。

「一緒に考える」ことは、「発表の機会」でも、重視している。

土曜の朝の会で、三年生の男の子が「先生、人は何のために生まれてきたのですか?」と聞いてきたことがある。川本さんは、みんなにこのテーマを投げかけた。

「お金もうけするため」

「おいしいもの食べるため」

「がんばるため」

思い思いの答が返ってきた。

幼い頃、同じ質問を母にしたという川本さんの答はこうだ。

「先生は長く生きてきて、わかったことがあるよ。人をしあわせにするためじゃないかな」

子どもたちは「ああ、そうか!」と、素直にうなずいたそうだ。

そして川本さんは、浜崎さんと全く同じことを口にした。

「こうして育った子どもたちは自分で考えて行動し、行動に責任を持つ。この子たちが大人になったとき、そういう子どもがまた育っていく。よい連鎖ができる。だから、子どもたちの将来に希望を持ってるんです」

川本さんは、「人と人とは、お互いのよいところを引き出し合う関係性でありたい。相手が子どもでも同じ。その子のよいところを引き出し、伸ばし、学びたい」と言い、こういう考え方を持てるようになったのは、人を尊重するワーカーズで、自分の感情が解放され、自由になったからだと明言する。

「だから、あなたのことも受け止めるよ、みんなで一緒にやっていこうよ、自分の意見を言っていいんだよ、勇気を持っていこうよ、と言えるようになってきたんじゃないかな」

人間にとって一番大事なことは人間の関係性であり、

働く場にも、利用者とも地域とも、心からの豊かな関係性をつくり、絆を育むことができるなら、子育ての力も湧いてくる。「雇う・雇われる」関係ではないワーカーズは、そうした関係性をつくっていくうえで、最もふさわしい組織なのだろう。

三年間を振り返って川本さんは、「ひとつの殻を破った自分がいます。これは自分にとって革命のようなものです」と言った。

希望

当事者性をもっていけるか

大野城市の学童保育の仕事は、ワーカーズの仕事としてはひとまず終わる。

子どもたちをめぐる環境が日に日に厳しさを増す中で、星平さんは、次のクールから学童の子どもたち、とりわけ障がいのある子どもたちなどがどうなるのかと心配する。

「子どもたちは毎年毎年変わってきています。多少いざこざがあっても自分たちで修復できる子どもたちには、いろんな楽しいことを提供し、集団力を高めていけます。でも、そこに入れない子どもたち、集団行動がとれない子どもたちがどんどん増えているんです。一人ひとりの子どもをどうするのかを、一人ひとりの指導員が当事者性をもって考えていかないと、子どもたちはぽろぽろ落ちていく。ワーカーズでは、常勤・非常勤関係なく話し合いもし、子どもたちと向き合ってきました。『今悲しいことがあったとき、訴えてきた子どもを受け止めるのはあなたでしょ、常勤がどうのじゃないでしょ』と言ってきたし、みんなそれを受け止めてくれた。それが、これからはどうなるか……」

ワーカーズ大野城事業所の学童指導員たちは、今の社会から「こぼれ落ちる＝落とされる」ような、困難を抱える子どもたちと向き合うからこそ、自らの当事者性を真剣に問い、協同労働の必要性を実感してきた。別のＮＰＯに移っても、その苦闘や思いが生かせるように、誠心誠意の引き継ぎに力を入れ、ワーカーズを離れても、「社会連帯機構」などの組織でつながっていこうと相談している。

協同労働は〝人を敬う労働〟

「協同労働？　何、それ」から始まった三年間だが、星平さんは、協同労働は、「まだ見ぬ困った人たちのためにこそあるのでは」と語り、その中核は「よい仕事」だと指摘する。つまり、どんな仕事であっても、仕事に主体

性を持つことだ、と。そして、協同労働を一言でいえば〝人を敬う労働〟だ、と。

「人を敬うことができると、三つの協同は全部成り立つと思います。働く仲間同士が敬い合えば、子どもにも当然、敬いの気持ちは伝わっていく。働く者同士の協同といってもわかってくれない指導員も、『人を人として敬ってください。それができていないところに子どもの落ち着きはない』と投げかけるとわかってくれます。だから、協同労働とは、人を敬うことからスタートし、よい仕事につながり、利用者、地域との協同につながっていくのではないかな」

ここまで話し、「じゃ、あなたは人を敬っているのかよ！　といわれるでしょうけど」と笑った。

川本さんも、ワーカーズになって、「ダメ」「ちがう」「悪い」などの否定語を使わなくなり、気がつくと、「うれしい」「大切」「しあわせ」を多く使っているし、「人を尊重することの連鎖」が生まれてきたと話す。けんかをした後、「〇〇さんだけが悪くない。自分も悪いところがあった」「〇〇さんは、いやな気持ちだったと思う」など、相手を思いやる言葉が子どもたちからも多くとび出す、というのだ。

「つくづく子どもは大人の鏡だと思います。だからこそ自分の人間力を磨かなければ」と川本さん。

私は、星平さんや川本さんの話を聞きながら、帯津良一医師のことを思っていた。埼玉県川越市にある帯津三敬病院の名誉院長だ。帯津医師は、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じるという老子の言葉から、患者さんを敬い、家族を敬い、看護師を敬い、全ての人を敬う、という思いを病院の名前に込めた。

未来に希望を込めて

人間の自立と主体性は、支配・被支配の関係、従属労働に甘んじている中からは生まれてこない。労働力を売り、雇われて働くのではなく、自らの労働の主人公になる。そこを基盤とした自由と平等こそが、子どもたち、そして働く仲間自身の成長にとっても決定的なのではないか。

ワーカーズは、公共サービスのあり方について、働く人々・市民自身が担い、豊かにしていく「市民化、社会化」こそが「新しい公共」のあり方であり、その際の働き方は、誰かに雇われる雇用労働ではなく、協同労働にならざるをえない、と主張。子育て支援の分野にも大きく取り組みはじめている。

「私たちは何もわからないまま子育て支援の分野に突

っ込んできたともいえる」。

ワーカーズの永戸祐三理事長は率直にこう述べ、続けた。

「けれども、市民・働く者自身が何事かを実現しようという思いで社会にとって必要なことに挑戦していると、必ず社会や利用者や地域が認めてくれる成果をあげていく。大野城でも、わずか三年で、高い評価を得、確かな根を残した。私たちは、協同労働によるよい仕事は、労働と仕事の未来に新たな展望を拓きうるかと問い、実践をさらに一層広げていきたい」

宿題の時間。川本さんと子どもたち

星平さんもこう決意する。

「私たちは〝なんかね〟しか言葉を持たなかったような凡庸な人間ですけれども、協同労働の理念を知り、協同労働で子どもを受け止め、真剣に取り組む中で、強くなってきたと思いますし、地域での為すべき課題の多さや大きさを知ることもできました。ここからが真のよい仕事を問われるのだと思っています。委託事業や制度・基金も活用し、一方では枠にとらわれない、子ども支援、子育て支援をしていきたいと思います。地域に協同労働を発信しながら、さまざまな方々、団体とつながり、手を携えて」

そして、川本さん。学童保育指導員を続けるために、二〇一一年四月から、また地元ＮＰＯに移る。しかし、ワーカーズで培ったものは生かし続けていく。

「人を尊重する、支え合う、つながり合う、このワーカーズの理念、精神の根底にあるのは人類愛、人間愛、愛だと思います。これは人間が本来持っているものだし、世の中が望んでいることだと思います。それを引き出し、人間らしく生きることを教えてくれるワーカーズの理念と、私の中の何かとが共鳴し、私は、未来に希望を込めて、歩き出したんです」

「労働と人間」を問い、本物の子育て支援を求め続ける仲間たちの声は輝いていた。